労働歌メモ

ハギシン

暮にリベルテールの忘年会が水道橋の呑み屋でひらかれた。戦争を知らぬ若者が軍歌を高唱するのは、戦前派戦中派にとって、いい気持のものではない。だが、目クジラたてることもないだろう。その席で水沼浩さんが

「あれ見よあれ見よタラリタラリと生血がしたたる
　めぐる機械の歯車の間にはさまる労働者
　死んでしまうまで搾られる……」

と小声で歌われた。添田啞蟬坊作詞作曲の『四季の唄』の一節である。一九一九年頃歌われ、禁止された。

続いて布留川信さんが歌われた。

「今鳴る鐘は三時半……五尺の寝台ワラ布団……」

ラッパ節といったかどうか、厭軍歌の一つである。こういう唄は戦後もほとんど聞かれぬ貴重品である。Yさん達が、世に埋れている労働歌・革命歌をひろって一冊にまとめたいといっていた。結構な事だと思う。歌は世につれというが、関東大震災のドサクサまぎれにやられた亀戸事件の犠牲者を悼んで、作者不明の『復讐の歌』がはやった。まもなくこれも禁止された。メロディは赤旗の歌である。

「亀戸の森夜はふけて　悲鳴は地上に充ちぬ
　血汐に飢えし銃剣は　可憐の闇に刺しぬ
　銘記せよこの秋を　殺されしわが友よ
　恨みは深し復讐を　われらは屍に誓う」

大震災の二カ月ほど前、赤化防止団を襲った高尾平兵衛が射殺された。彼の社会葬で大合唱された弔歌は、同じ赤旗の歌のメロディで、加藤一夫が作詞した。

「しののめの明けぬまに　戦い早やも起り
　勇敢に戦いし　戦士はついに倒る
　悲しみのこの時よ　約束のこの時よ
　祭壇のなきがらは　恨みを呑みて眠る」

所で「労働歌」というと、大ていの人がメーデー歌や赤旗の歌やインターナショナルを連想する。然しあれは闘争歌ともいうべきもので、労働歌の一部にすぎない。昔から農業・漁業・鉱業の労働者に歌い継がれた労働歌がある。学者の中には「体を激しく屈伸させ腕を振るい足を動かす重労働をしながら、歌を歌う事は困難だ。労働歌は休憩や夜食や祭などの時、労働の状況を思い浮べて歌ったものだ」という人がいる。それも一理ある。だが手足を軽く使うだけの単調なくり返し作業には、歌がともなうだろうと思われる。小野武夫氏が『農村社会史論講』で農民一揆、労働歌と農民心理その他について、ユニークな研究を展開された事がある。労働歌の研究は歴史的文学的にも大いに意義がある。できれば更に一歩進めて、中国・朝鮮・南方の民族音楽との比較研究が欲しいものである

地方同志からの手紙

福島・喜多方在住の新明さんは豪雪地方に本拠を置き、毎日の労働を通して—本年は不況のため稼働日数が少いのを嘆いて居られる—訪ねてくる人ごとに無言の例示と勇気づけを与えている。回送された手紙はうりゅう君から伝言のあったもので、一同志の着実な実践がどれ程周囲に励ましと行動の契機になるかを例証するものである。都市生活者と地方生活者の違いはあっても、労働条件は同じく厳しい。しかもその中から自己の抱く思想に少しでも近く環境を整備するとか、部分的にでも実現させようと努力するのは、それを持続して日常化するのは至難である。ここに障害を排除して一つの仕事を成遂げた記録がある。敢て同志からの手紙として紹介するゆえんである。但し紙面では実践記録を中心に、他を割愛させて貰った。

（文責・はしもと）

「…三年前まで都会にいた私が、この見知らぬ静岡に住みついて、活動する様に勇気付けたのは他でもなく、うりゅう君夫妻の行動力と新明さんの言葉なのです。たった三万五千の田舎町で〝キチガイ〟視される駅頭のアジビラ配り一つをとってみても、この十万の町富富士宮で、どうして私がじっとしていられましょうか。雪に閉ざされた福島の喜多方に於けるあなた達の熱情は、今私に新しい戦い方と未来の展望を与え、少しづつながら、その活動を実らせてくれています。今報告する事は、うりゅう君たち、新明さんにも嬉んでもらいたいのです。先に会合で話しました様に私が第一回の農作物直販をした工場で半農の労組員（私の加入している合同労組で、中小企業労働者約二百名で構成）が今まで町の市場に卸していた農作物を、毎週土曜日に自主的に、私の計画とは無関係にやり始めたのです。私はこの事をつい先日、組合の会合の席で、第二回目をやる旨知らせる際に、その工場の代議員から聞いたのです。そればかりか、その工場の他の半農組合員からも、古米やもち米、みかんなどが可なり安く持ち込まれ、今では、これを社内放送で伝え、工場の全組合員（全部で八〇名くらい）は、もはや、八百屋で買い物をせず、全て野菜類はこの毎週土曜日の相互扶助に頼り切っているそうです。物は市価の六～七割で新鮮。私に勝手にやり出すなんて、何てすばらしい労働者でしょう。農作物を提供するのも、それを買うのも、同じ組合員なのです。私はうれしくてたまりません。十二月二十九日に第二回目をしかたなく、他の組合工場でやりました。その日まで私は風邪でずっと寝込んでいた

のですが、車で一時間くらい山奥へ入った友人の組合員の部落へ、雨にうたれながら、又オートバイに乗り変えて、標高二百メートルの山にある畑から、農作物を八回の上り下りをして降ろし、それを車に積んで工場（となり町に在る）へ売りに行ったのです。手は雨の冷たさで無感覚になり、体をぶるぶる震わせながら、女房と子供とで白菜を束にし、大根の土を落とし、そして、二五〇〇円の売上げで全部はけ、第二回目の（その工場にとっては初めてだったのですが）労組直販を終えたのです。たった二五〇〇円のために、しかもそれはその日のうちにそっくり生産者に渡し、私の風邪はすこぶる悪くなりました。でも私には満足感がありました。私の考えている事が、小さいながらも実践されているのですから。急な山道を雨にたたかれながら、オートバイでスリップしながら、私の手が冷たさで痛くなっても、あの喜多方での〝キチガイ〟的活動に負けてはならない、と云う支えが有りました。そして、第一回目のように、たとえ微々たる活動でも、売上げが二千円程度の小規模な直販でも、あの労働者たちの様に全く、意図しなかった、自発的な、自治的な活動へと火をつけることができるかもしれない、と云う期待が有りました。

こうした事は全て、うりゅう君たちの物おじしない即行動力と、新明さんの、某君に語ったと云うあの〝君は一人でビラ貼りをした事がありますか？〟と云う言葉に支えられているのです。

新明さん、今一番必要なのは、アナキズムの事を書いたぶ厚い本でも、すばらしい組織の綱領でも、すばらしい社会の理想でも、トラックいっぱいのダイナマイトでもなく、実に、新明さん、そしてうりゅう君たちの様な、真に悩み続け、〝キチガイ〟視され、しかも本の活字にも登ってこない、真の同志の存在なのだ！――と私は思います。この事を確認するだけで、私は遠き喜多方の地と強く強く連帯できるものと信じています。……」

近き第二の喜多方より

昭和五十年 元旦　　富三

【海外だより】

〈アンリ・ネル友の会手帖〉アンリ・ネル友の会はゴンクールアカデミー会員J・H・ロズニーを座長としてアンリ・ネル（1861～1938）の著作、カイエの蒐集・再版にあたっている。運営委員には日本では松尾邦之助氏が参加している。アンリ・ネルの傾向はスチルナー流の個人主義的アナーキズムで、自由の国に住む自由人〉が理想だ。会は一九一九年に創設され、年四回発行の手帖はNo.115が七四年十二月号である。アンリ・ネルの収録エセイはプロバンス語擁護の論旨で、例えば

〝水車小屋だより〟のドーデイのもののような土の臭いのする言葉を支持する。この系統は中世から近世にかけ吟遊詩人によって名高いトルバドルの詩に用いられた言葉である。吟遊詩人といえば聞えはいいが内実はアブレ人、学生、放浪者であり、宮廷をめぐり酒屋にたむろして宗教歌、恋愛歌、武勲詩を歌ったものである。その真価は古くはセルバンテスが、現代では英国の歴史家ドウソン、哲学者ヴェルジャエフが認めている。

手帖ではアンリ・ネルの思想に近いアムステルダム生れの放浪作家エデュア・ドオウ・デッカア、筆名ムルタトルイ（1820～1887）あげる。彼はスマトラまで流れ〈日本人の対話〉他パンフ、思想書、寓話等の著書があるという。ここでは寓話を訳出する。

権威の話

チガタは乳牛の乳しぼりに精をだしたから、兄達が家に持ち帰る乳より良質の脂肪を含んだ乳が得られた。

農民が牧場に出かけるづっと以前、そう、その時代のもっと前には、牝牛は囲いの中で極く簡単に屠殺され肉牛になるのがあたりまえの運命だった。

人間は牛肉を食べるが、それは人間がはるかに強いからで、乳房には沢山な乳もあるからだ。

けど囲いの中で愚かしい顔付きをして運命を甘受する牝牛はどうなるんだろう？　人間はあたりまえのように乳の最良の部を管理し、クリーム、脂、バターを作り優秀さを誇示するけど、哺乳類から遠ざかる。

辛棒強く最後の一滴まで搾る人が良い乳を家に持ち帰るのだ。圧搾する人は滓（おり）からクリームを作るのだ。ところでチガタは圧搾はしない。兄達がするのだった。しかもその兄達は父の牝牛を取扱うよりもっといい仕事があると口実を設けていた。だから彼女（チガタ）は乳しぼりの権利を存分に活用していた。

―お父さん、俺に弓と矢の使い道を教えて呉れよ。そうすりゃ狩人になって、世間を渡り、自分の好きなだけ働くぜ―兄のひとりが言った。

―父さん、俺には漁を教えて呉れろよ。いつまでも牝牛の世話じゃ馬鹿になっちまう―二番目が言った。

―俺は舟の造り方を教えて貰いたい。木を切って、丸木舟を海に泛べて乗りこむんだ。あの崖の向う側があるのを知りたいよ―三番目が言った。

―俺はブロンド娘と暮したい。自分の家をもってさ、チガタが俺のために乳をしぼって呉れるのさ―

こうして四人の兄達は誓いをたてて、意志を統一し熱望した。やりたいことで夢中になり、父の牝牛の乳しぼりは一致してやれなかった。そこで乳房の中にクリームは放ったらかしで誰も活用しなかった。

チガタだけは真面目に仕事をした。

―父さん、俺達は出かけるよ―兄達がある日言った。

—ここで乳をしぼって呉れるのは誰だい—不安気に父が訊ねた。

—チガタがいるじゃないか—

—だけどあの娘がいつか、あたしは狩人になりたい、旅行者になって世間をみたい…と言ったらどうするね—

四人の極楽トンボはちょっと途惑って答えた。

—父さん、あれには何も教えないことだよ。そうすりゃ一生乳しぼりをやるさ。内から突きあげる衝動があるなんて教えないのさ。素早い矢を追いかけなければ、狩の味は知らないだろう。器用に餌付けした鋭い鈎を魚が呑みこむ技術を教えなければ、あの娘は投網や漁網を使うなぞ考えつかない。ブロンドの男をどうやってものにするかなんて教えちゃいけないんだ。すべての事に無知なままにしておくんだよ。お父さん。そうすりゃ一生あんたと暮し、牛乳はいつだって脂肪がたっぷりさ。だけど俺達は行かせてお呉れよ。好きなままにやりたいんだ。—

四人の息子はこう言ったが、用心深い父親は答えた。

—そうかい、お前達はあの娘に教えないように、理解をさまたげさせるんだね。だが、いつか木の上を青蠅が飛ぶのをみたらどうするね。小川の土手で、魚が小虫を追ってはねあがるのをみたり、葦の間にもぐりこむのをみたらどうするね。五月になってうまごやしの草叢にひばりが巣をかけるのはどういう訳けだと訊ねたらどう答えるのかね—

四人の極楽トンボは反省して答えた。

—あの娘にそんなことが判るものか。経験や熱望から学ぶほど賢くはないんだ。だけど俺達はあんたの教えて呉れるものは何によらず覚えるよ—

父親が言った。

—あの娘は馬鹿じゃない。わしがいなければお前達だってあれと同じように理解できないんだよ。チガタは決して馬鹿じゃない—

暫く深刻に考えた息子達は答えた。

—考えたり、知ったり、熱望するのは娘っ子には罪なんだ—

用心深い父親はこの答に満足した。息子達にはそれぞれ漁取り、狩り、遠くへ行くこと、結婚するのを許した。けどチガタには知ること、考えること、熱望のもち方を教えた。彼女は素朴なままに脂肪の濃い乳を父の許へ持ち帰りつづけた。

今日も彼女はそうしているのだ。

—ムルタトルイ作—

江口 渙氏死亡

戦前、社会主義同盟に参加、労働運動社とも近かった氏は本年一月死亡しました。

★野火☆野火★野火☆★☆★

▼「日韓連帯ニュース」(1号～5号)

発行は「日本の対韓政策をただし韓国民主化闘争に連帯する日本連絡会議」。昨年四月十八日に開かれた「日本の対韓政策をただす国民集会」で発足した。金大中氏を助ける会、金大中事件を考える法律家の会、韓国問題キリスト者緊急会議日韓正常化青年会議、「富山化学の公害輸出をやめさせる」実行委員会、早川・太刀川両氏を救うための連絡協議会などの諸グループと世話人代表青地震以下事態を黙視しえないと感じている個人が加わっているという。『ニュース』には毎号、日韓連帯会議や各運動体からの報告やアピール、共同行動のスケジュール、署名とか「東亜日報」定期講読のような具体的行動の協力要請などが載っていて運動の動きを伝えている。十一月発行の三号から月刊となり、紙面の充実をはかるとともに、ひろく定期購読を求めている。(年八百円)リベルテール読者の購読を勧める。

ここで日本革命における日韓問題の重要性を解明する余裕はないが、日本の経済援助が朴ファシズム体制を支えていると同時に、政治・経済のみならず文化の側面においても、朴ファシズム体制に見合う体制が日本で構築されつつあることは確かである。金芝河氏が書いているように「朝鮮野郎の血を吸って咲く菊の花」こそ、日本の天皇制ナショナリズムであり、この日本の憎むべきナショナリズム解体のための重要な要因が、韓国の民衆運動の勝利と、また在日外国人の権利の獲得にあると考える。

ともあれ、イデオロギーからではなく、韓国民衆の声に耳を傾けながら、具体的現実にそくしつつ運動を展開しようとしている、この日韓連絡会議の活動は注目すべきである。

▽連絡先　新宿区神楽坂6—44 石井ビル2F神楽坂事務所

▼「FRI号からの通信」(WRI日本部)

FRI号とは、ニュージーランドの非暴力直接行動グループの手になる核実験抗議船である。一九七三年にフランスの水爆実験に対して妨害阻止行動を行い、七四年には核実験が行われた総ての所にむけての長い航海を開始した。そして現在、三月一日ビキニ・デーを目標に日本へと航行中だという。このFRI号を入港地で歓迎し、連帯集会などを行うために、WRI日本部の呼びかけで、「FRI号連帯行動実行委員会準備会」が作られた。またWRI日本部は、FRI号来日を機会に、次のようなことを目指すという。「1、FRI号の運動の思想・方法・形態・経験を学び、今後の運動に役立てる。2、具体的にアジア太平洋地域住民の核被害を知ることで、原爆ナショナリズムともいうべき日本人の核に対する意識を衝く。3、毎年8月、年一回の行事化し、一般化することで稀薄化している原水禁運動と、あらゆる反戦・反軍・反軍産運動との結合の契機をつくり、双方の

強化をはかる。

なお準備会は、核保有国、実験国に抗議するための「FRI号カード」の受け付け(カンパとも一口五百円)と、各種平和団体に対して共同行動の呼びかけを行っている。

FRI号歓迎が実際にどのようなものになるか想像がつかないが、いずれにせよ、これを機会に、WRI日本部が今後どのような運動を展開するか注目したい。　(江藤)

▽準備会 ― 大田区蒲田7～61～8　エンリコビル3階気付

▼東京・神田・全電通会館ホールで〈読む権利を奪わせない！

―出版物流通の自由を考える―〉集会が2月1日午後5時30分開かれた。主題は12／2、12／11日の両日に亙り、神田ウニタ書舗の店頭から爆発物取締罰則による、パンフ『栄養分析表』『赤軍』11号『腹腹時計』の捜査押収が行われ、その実情報告であった。また『赤軍』11号については女性一人が経営する印刷所まで襲われ、機械タイプ、帳簿を押収されたと言う。警視庁は「爆弾製造の教唆であり、本そのものが教唆にあたる、爆取四条の適用」との由だ。20数年前、日共の火えんびん闘争の教本のリプリントが何故先年発行された事になり、それを売れば「心情的共犯者」になるのか不可解である。爆弾は無実な第三者に被害を与えるからいけない。だから爆弾教科書はいけない。それを売る小売店がいけないとなる。しかしこの論理にはウラがある。何が何でも爆弾は排除しなければならないとしても、それに「教唆」をこじつけて、ミニコミ出版物の締めだし、定期購読者名簿の調査等種々の外圧を加え、流通の面から小数意見の孤立分断を策していることだ。時あたかも同日に読書コンクールが発表され、こちらでは皇太子夫妻出席の下で小学一年生の優秀作文受賞式とパーティが行われた。それはいいとして、片方では禁圧の輪をせばめつつあるのはどうだろう。近く郵便料の値上が目論まれている。ウニタ書舗の他には、新宿模索舎の『四畳半襖の下張』が〈わいせつ文書販売〉に問われ、捜査、押収、店員二名逮補、起訴、公判中であり、九州小倉では駅のコインロッカー爆発に関連して、北九州市金栄堂の『子供の科学』購読者台帳提出を拒否した事件がある。また龍渓書舎では大蔵省管理局『日本人の海外活動に関する歴史調査』(全十二巻)の復刻刊行差し止め事件がある。この一連の処置が思想発表、言論の自由の抑圧につながるかどうか厳重に監視し、抗議しなければならない。

―出版・表現活動への弾圧対策委員会

東京・千代田区神田神保町1～52　ウニタ書舗

新宿区新宿2～4～1　模索舎

▼黒色戦線社がジョージバレット著、鈴木靖之訳の『**アナキスト革命**』A5判24頁 定価一五〇円を刊行した。バレットは岩佐作太郎訳の『無政府主義者はかく答う』で知られているがこのパンフでもみるべき所が随所にある。例えば、2.なぜ**我々はアナキストであるか**と設問して「さて無政府主義者は

物事のはじまりを考えるところから出発する。いったいどこに課税されるべきかと論争する前に、そもそも課税とは何か、誰が他人に課税するいかなる権利または理由をもっているかについて検討した方がいいと提起する。」

「…革命家は何が真に根本的であるかをのみ考え、それによって精神を完全に明確に保ち、社会的事実をそのもっとも簡単な点から考えはじめることができるのである。」―本書9頁―

訳者鈴木靖之について、まだ伝記的な事実が判っていない。宮崎晃その他の編集による『農村青年社運動史』でも不明である。付録の読売新聞号外で農村青年社運動の実情が判るがこれは歪曲とセンセショナリズムを割引きしなければならない。第一の疑問は昭和六年東京に主体を置いたとされる団体が信州地方の暴動陰謀で何故昭和十二年一月十一日に摘発されたのか。旧大日本帝国の特高は証拠固めに五年の歳月を使うほどノンキではない。事実は昭和十年十一月の日本無政府共産党事件に関連して、農村青年社の存在したことが判り、(昭和五・六・七年の農村の不況期に対応した運動だったと推定される。主要論文の発表は、「吾国に於ける革命の実行について」宮崎晃　昭和六年　「農民に訴う」　宮崎晃　昭和五年　「如何に為すべきか」　鈴木　昭和六年　「農村青年社解散について」　昭和七年九月二七日とある。)〈初の治安維持法の適用事件〉と当局は言うが、全くのフレームアップ事件である。即ち号外が「同県下一済に武装蜂起し、長野・松本・上田・上諏訪その他の枢要都市を焼き払い……」とある記事は宮崎晃が昭和六年に70部配布した〈吾国に於ける革命の完行について〉に拠って居り、この集団は昭和十二年までその実施を引きのばしていたことになる!?　法律の原理にある罪罰の不遡及に反して任意な虚構に基づき処罰したのだ。

▼遊撃第49号をみた。「原始時代から継承してきた人間性(1)」川崎・長谷川武とある。長谷川さんとは交流会で顔を会わせたと思うが健在の様子なによりだ。連載が始まったばかりのエッセイだから批評はつつしむが、猿と人間は系統が異るとしてダウィン的発想に一矢を報いている。表現の自由に関して宋斗会氏の詩「奴隷の子」の中で〈エタ非人の子よ〉とありこのエタを差別語として伏字にしたのが編集子と読者の間で問題になっている。勿論この号では復元されているが、文脈からみて伏字にすることはなかったとみる。作者は明きらかに被差別者の側から呪詛しているのであって、奴隷の子にのみ恵みをたれ給えとの祈りがこめられているからだ。

発行者は詩のべ平連(小金井市中町3の12の22直毘荘仁号長谷川修児)で、小西裁判や樺太在住朝鮮人帰還訴訟の記事や詩の合評会・「天皇なんかタブーじゃない」と題した興味深い集会開催等文学者としての詩人の集まりでなく生きている人間の心をもっている詩を満載して活発に行動している様子です。　(莫空人・甲斐)

★編集室

★不況だといわれながら上野のキャバレーは連日にぎわっている様だ。同時に地下道でうずくまる者も多い。都知事選には両陣営のファシストがからみあう様子だが、邸宅に住んで銀座のバーで飲む奴ら共が「都民党」を名のるなんて笑うに笑えやしない。

（甲斐一）

★ル・リベルテールは仏語で自由人の意で、ラ・リベルテールは自由の意だと心得ている。無政府主義者はアナルシストだ。プルードンがア＝ナルシーと規定した際には無政府の意はなかった。組合、グループ、協会などの含意で、その最大のものが連合である。ア＝ナルシーとは無権力、無権威の民衆のための民衆による民衆の組織とその状態を指示するのであって、ヌボーソシャリスム（新社会主義）の担い手であった。

わがリベルテールが無政府主義誌を名乗るのは思想の洗いだしを含めて新境地を開拓しようとの気持である。

（はしもと）

★今年は社会的にも個人的にもいろいろなことが起りそうです。いきあたりばったりで、状況に流されないように、用心しようと思っています。いやもっと自己を主張しなければならないとも感じています。が、もっとも関心をもっていることのひとつが、エスペラントとその運動です。昨年はいくつかのエスペラント関係の本が出版され、マスコミ、ミニコミでもいろいろ論じられましたが、運動のほうは、依然停滞しています。ここでも、高い理想に導かれた新鮮な力が必要とされています。ついでに、エスペラントに興味のある方は、エンリコ・ビルでの学習会に参加しませんか。それから、リベルテール紙上に、エスペラントによる海外の運動の紹介や、エスペラント論などを載せたいと思っているのですがなかなかはかどりません。また、エスペラント版『自由連合』四号を近いうちに発行する予定です。

（江藤敏和）

★前号の誤植訂正

▼読書会と共同保育
（折内和喜君の連絡先電話）
三八四―九二六八

▼杉藤二郎「思い出の一コマ」
9ページの慶知第一中は愛知第一中の誤

★「米よこせ母子像再建のよびかけ」

カンパ要請として二次要請がきています。

三月三十一日までとのこと。どんなことをしても建てたいということですので職場で、個人で是非カンパして下さい。

東京都渋谷区千駄ケ谷四の一の十三
生協会館「生活協同組合 久友会」気付
米よこせ母子像再建の会

（なおリベルテールの会にてもあつかいます。）

エンリコビルでの定例活動

◎共学読書会（初心者の方のみ）
第二、第四日曜日午後一時より夕方迄

◎エスペラント語学習会（興味のある方だれでも可）
毎週水曜日午後七時より
東京都大田区西蒲田7の61の4 ☎（七三五）一二四六
国電蒲田駅より徒歩3分

★リベルテール・サロン

■水道橋東口下車徒歩2分「コージ」■毎週火曜日 午後6時より8時頃まで■どなたでもどうぞ■

■一九七五年一月十四日から再開